（二）老主従

リヒャルト・フォン・グリンメルスハウゼン子爵がフリードリヒ四世のもとへ伺候したのは、一一月二五日の昼下がりのことである。七五歳のこの老貴族は軍においては中将の階級を持つものの、それは宮廷では子爵として門閥貴族の末端に連なる身分と、『灰色の大公』時代からのフリードリヒ四世の遊蕩仲間としての経歴に与えられた名誉職と見做されている。が、この年、一八個を数える帝国軍制式艦隊の内の一つが、この老貴族の麾下に委ねられることが決まっており、この日の伺候はその『お礼』言上のためと説明されている。

「…ところで、陛下、来年早々に出征の儀を承っておりますが、いずこへ参るのでございましょうかな」

とは言え、年齢を合計すれば一三〇歳を軽く超えるこの主従の会話は、皇帝とその臣下の武官との会話というには緊張感を欠くこと甚だしい。

この時代、平均寿命は一〇〇歳を超える。その意味で、彼らはすでに人生の七割弱を歩み終えてはいた。ただ、医学とならんで発達した不老学は『老い』の抑制にも一定の成功を収めていた。事実、宇宙暦時代よりも老化が人々を訪れる時期が平均して二〇年近く遅くなったとさえ言われていた。宇宙が手の届かぬ天としてのみ、人類の頭上に在った時代に平均寿命の七割を刻み終えた人間よりも、彼らははるかに若々しくあってもよかったのである。

にもかかわらず、彼らを包む、その周囲では時すらもその流れを緩めるかに見える『気』は腐朽とさえ言いたいほどの『老い』にほかならなかった。

「ヴァンフリートじゃ…とシュタインホフがの、言上してきおった。そちは、ヴァンフリートを知っておるか？」

「はて…聞いたような、聞かぬような」

グリンメルスハウゼンは眠そうに目蓋を動かして、右手でこめかみを掻いた。

「いずれ、叛徒ども猖獗の地でございましょうなぁ」

「…アンネローゼの弟がの、些か手柄を立ててきおった。リーフェンシュタール家のヴィンフリート、存じておるか？」

「ヴィンフリート…？」

再びグリンメルスハウゼン子爵がこめかみを掻き、しばらく沈黙に陥る。そのまま眠ってしまったかのように反応が消えたが、皇帝の方も返答をせかせるでもなく、玉座横のテーブルから水のグラスを口に運ぶ。グラスをテーブルに戻した皇帝が、そのまま玉座の上で船を漕ぎ始めたかに見えた時、ようやくグリンメルスハウゼンが軽く掌を打ち合わせる仕草をした。

「おお、思い出してございます。なかなかのやんちゃ坊主のようで…もう、任官しておりましたか」

「准将…いや、少将じゃったかな。うむ、いや、今度、少将にしてやった。将官になれば、爵位を頂くなどと申しておったゆえ、遅うはなったが、そちと同じ子爵をな、名乗らせてやることにした」

「それは、それは…目出度うございます」

「エアハルトの息子のことは…まあ、措け」

もう一度、緩慢極まる動作で皇帝はグラスを口に運ぶ。それからどう切り出したらよいか迷うかのように無鬚の顎をつまぐるのに、今度はグリンメルスハウゼン子爵の方が声をかけた。

「――――もしや、グリューネワルト伯爵夫人の弟御のことでございますかな？」

「あの者は准将にしてやることにした」

フリードリヒ四世の口調は、子供に菓子をくれてやったというに等しかった。
「一七で准将は若すぎる、などとブラウンシュヴァイクの…誰じゃったかな…孫じゃったかな、ねじ込んで来おったが、複数の艦を初めて指揮してのけたにしては、なかなか鮮やかなほどの用兵ぶりじゃったそうな」
「陛下――」
およそ、相手の言うことを聞いているのか聞いていないのか、皇帝が話している間に割り込むなどという許し難い不敬を、グリンメルスハウゼン子爵は平気で冒した。もっとも、皇帝の方も、遊蕩時代からの旧友に不敬を問うなどということはあり得ないのだが。
「ブラウンシュヴァイク公には孫はおりませんぞ」
「そうじゃったかな…まあ、よい。アンネローゼの弟を准将にしてやった。いずれ、近いうちに爵位を嗣がせようかと思う」
「結構なことで、ございますな」
「そちもそう思うか」
「爵位に相応しからぬ者であれば、その重みに耐えきれずに自ら滅びの道を往くでありましょうし、相応しい者であれば負う物が重ければ重いだけ、自らに力をつけていきましょう。いずれにしても結構なことと、臣めは存じます」
「そうか、そう思うか」
フリードリヒ四世は頷いた。
「見てみぬか、アンネローゼが弟を？」
「は…グリューネワルト伯爵夫人を、でございますか？」
「そちなどにアンネローゼを会わせるものか」
『ふぁふぁふぁ』としか音の当てようのない笑いが、老皇帝の咽喉から漏れだした。老皇帝――まだ六〇歳であり、この時代では老人と称されるべき年齢からはほど遠いにもかかわらず。
「弟の方じゃ。来年の出征に、そちの麾下につけるよう、シュタインホフとミュッケンベルガーに申しつけておこう」
「それは、また…」
「使いこなせるか？」
「なかなかをもちまして、そのような…」
自分がごときに使いこなせるような若者ではございますまい――それがグリンメルスハウゼン子爵に応答だった。自分などが使いこなせるようなら、一七で准将の地位にまで駆け上がってくることなど不可能に違いない、と。
どこかうつろな表情と共に、フリードリヒ四世は旧友たる老子爵の言葉を肯った。
「あの者を麾下に置いた、ただそれだけのことでそちの名も後世に残る…ということもありえようからの。さて、そろそろ薔薇の世話をする時間じゃ。久方ぶりにそちと話ができて楽しかった。今少し、繁く伺候せねぬか」
「なかなかもちまして、こう見えましても帝国軍において中将を拝命する身。まして、これよりは制式の艦隊まで指揮に置かせて頂く身であってみれば」
「つまらぬの…ならば、艦隊司令官などと言う地位は解任し、予が側付きの身にしてやろうかの？」
「――そればかりはなにとぞご容赦のほどを…」
グリンメルスハウゼン子爵は叩頭するが、どこまでが本気でどこからが冗談なのか、他者にはうかがい知れない。フリードリヒ四世は微笑い、顔を上げた子爵もまた半ばは笑顔である。
立ち上がり、退出の礼をしかけてから、しかし、グリンメルスハウゼンは大仰に顔をしかめた。
「陛下…」

「まだ、なにかあるか、グリンメルスハウゼン？」
「本日は、陛下より、ご相談の儀あって伺候致したしだいと存じます。陛下のご用はお済みでありましょうかな？」
「そうじゃったかな？」
　真顔でフリードリヒ四世は首をかしげる。グリンメルスハウゼン子爵も、そんな皇帝には慣れきっており、与えられた座に身を沈めたままゆるゆると上体を揺らし続けている。フリードリヒ四世が回答への長い回廊を辿り終えるまでは、何時間かかろうとそのままで待つつもりに見えた。
　が、子爵が何時間も待つ必要はなかった。
「そうじゃ、そちに頼もうと思い立ってな」
「光栄至極に存じますぞ、陛下。この老骨にして、なお陛下の御為の働きができますとは、望外の幸せと言うばかりにて…」
「アンネローゼがことじゃ」
　臣下の長広舌を、皇帝は無視した。
　一瞬、何を言われているのか分からぬという風情に目を瞠ったグリンメルスハウゼンは、大げさな身振りで手を振って見せた。
「今更、五〇も若い室など迎える気はございませんぞ、陛下」
「そちにアンネローゼを下しおろすなどいうことは、金輪際あり得ぬことよ」
　枯れきったかに見える皇帝の表情が、一瞬、生々しいまでの好色さを露わにした。ラインハルトが目にしたら、その表情だけで皇帝に躍りかかってのど頸を締め上げたに違いないほどの露骨さだった。
「そうではない。そちと話しておると、どうも話が長くなる」
「左様でございますな」
「何の話をしておったのかな…」
「グリューネワルト伯爵夫人のことと承りましたが？」
「ふむ———そうじゃ、そちに頼みたい。誰ぞ、心利きたる、貴族の…そうじゃな、下級の貴族、男爵家、あるいは帝国騎士がよかろう、そういった家の娘に心当たりはないか」
「お召しになりますか？」
「何を戯けておる」
　皇帝は顔をしかめたが、特にグリンメルスハウゼンの脱線を咎める気はないようだった。
「そうではない。そちと話しておると、どうも話が長くなる」
「左様でございますな」
「何の話をしておったのかな…」
「グリューネワルト伯爵夫人のことと承りましたが？」
　話が同じループを回り始める。そのまま、同じやりとりを四、五回ほど繰り返した後、ようやく子爵の方が話題のハンドルをループの外へ切ることに思い当たったようだった。
「どのような娘をご希望でございますか、陛下」
「そうさな…アンネローゼと同じ年回りで…機転が利き、武術の心得のある娘じゃが、どうじゃ、グリンメルスハウゼン、心当たりがあるか？」
　どちらが相手に会わせているのか…第三者が彼らの会話を観察していれば呆れただろう。あれほど、同じ会話を繰り返していた二人が、そのまま新たな話題に入り込んで、僅かな違和感をも見せていないのである。
「はて…伯爵夫人はお幾つでいらっしゃいましたかな？」
「二三…いや二じゃったかな。まあ、そのような年回りじゃ」
　今度は顎に手をやるのがグリンメルスハウゼン子爵の役回りで、ふたたび、両者の会話には長大な『間』が開く。予定をはるかに越して長い謁見に、式部官がじれて覗き込んだようだったが、彼らがわずかでも注意を払った様子はなかった。

「おお」
「心当たりがあったか？」
「ございました。シュミットバウアー男爵…コルネリアス・フォン・シュミットバウアーが娘がおります」
「先帝がの、どうにもコルネリアスは煩くてかなわぬ、と一度、愚痴っておられた。そのように煩い男だったのか？」
　先代のシュミットバウアー男爵であるコルネリアス・フォン・シュミットバウアーの、最後の進言を受けた当の本人が、自身に他ならぬことなどフリードリヒ四世の関心の域外だった。
「畏れ多くも大帝陛下のお言葉に、シュミットバウアー男爵よりの言葉を軽く聞くな、との御諚がございます。シュミットバウアー男爵からの上申は、それがいかなる中身だとて、陛下はお聞きにならねばならぬ…臣めは、そう承っております」
「…そう言えば、コルネリアスの跡目はどうなった？」
「さて…どうなりましたやら…とんと存じておりませぬ」
「そうか…まあ、よい…で、コルネリアスの娘、どのような娘か？」
「歳は、さよう…二二、三と聞いております」
「ふ――――む」
「なかなかの美形と聞き及びます」
「美形か…」
「お召しになりますか？」
「馬鹿を申せ」
　皇帝はひらひらと手のひらを振って見せ、旧い臣下の言葉を否定する。しかし、奇妙なほど困憊した印象を与える風貌の中、そこだけが活力を失っていない口元が獣じみた薄笑いを浮かべ、言葉を裏切っていた。
「二二と申しますと、やや薹（とう）が立っておりますな。陛下のお好みには適いますまい」
　世の中のほとんどの女性を敵に回すに違いない科白を、グリンメルスハウゼンはこともなげに口に上せた。フリードリヒ四世が一〇代半ばの少女に漁色の対象を移してから、もはや一〇年余りの時が経つ。ただ、グリンメルスハウゼン自身は、皇帝の漁色に行を共にしたということは実はほとんどない。
「どうも若すぎる相手は、この年になりますとな、面倒でございまして…」
　それがグリンメルスハウゼンの韜晦だったのかどうか。あるいは青年時代からの悪縁とも言うべき皇帝への、彼なりの諫めだったのかも知れない。何十度めかの寵姫を迎えた際に、ぬけぬけと御前で惚（とぼ）けるグリンメルスハウゼンに、フリードリヒ四世は苦笑を隠さなかった。
「これは、他をおすすめすべきでしたかな？」
　皇帝が心を動かした…グリンメルスハウゼン子爵はそう見たようだった。
「お召しになるのも宜しいでしょうが…」
「グリンメルスハウゼン、何を先走っておる。予がいつ、コルネリアスの娘を後宮へ入れると申したか」
「これはしたり…」
　わざとらしく、グリンメルスハウゼン子爵は顔をつるりとなで下ろし、気の抜けた表情で笑った。
「そのお心づもりはございませぬか？ 歳を召しまして、いささか気が短うなったやも知れませぬな。もとより、その娘、いささか障りがございましてな」
「…障りと申すか」
「さよう、婚約者のある身でございますそうな。ほれ、さきほど申し上げた、リーフェンシュタール家の…」
「ふむ、シュミットバウアーの名跡を嗣ぐの嗣がぬの、となにや

らややこしげなことを申してきておったな。せっかく子爵にしてやったというに、今更、男爵でもあるまいに…と申して、シュミットバウアーの家を子爵家にするというのも、くだくだとものを申す者どもの多いことじゃしの――どうしたものか」
　この日の謁見で何度目か、皇帝もグリンメルスハウゼンも覚えてはいなかったし、数える気さえなかっただろう。考え込むように皇帝が目を閉じ、その言葉を待つグリンメルスハウゼン子爵は、こちらはそのままゆらゆらと身体を揺すり始めるのは、そのまま浅い夢路へ歩み込もうとしているかに見える。
　再び、式部官がそっと謁見室内を覗き込み、今度ははっきりと舌打ちをした。自ら政務を執る気力も意欲もない皇帝。実際にも実権はブラウンシュヴァイク公以下の門閥貴族の手に握られ、自ら揮うべき権力のかけらすら持たぬ玉座のお飾りに過ぎぬとは言え、形の上では帝国の最高権力者に対する謁見希望者は、控えの間に入り切れぬ程度には多い。また、形式上でも皇帝自らが言葉を賜らねば始まらぬ儀式や人事も少なくない。にもかかわらず、この老人二人は太平楽にも雑談を交わしながら、あまつさえ居眠りまでしているのだ。
　とは言え、一介の式部官が皇帝と、その旧い臣下の謁見に割り込みを入れると言うことはあり得ない。
「――して、何の話じゃったかな？」
　この日、何度目になるか分からぬ台詞をフリードリヒ四世が口にするまでに、眠りの天使が謁見室を何周かし終えていた。
「シュミットバウアーが娘の話にございましたかな」
「後宮に召すには及ばぬ。ヴィンフリートか、あの者の婚約者なれば、ブラウンシュヴァイクもあれやこれやと煩かろうしの…いや、そうではないな。アンネローゼがことを話しておったと思うたが？」
「――さようでございましたかな…」
　グリンメルスハウゼンは、ゆるゆると首をかしげてから、『おお』と掌を打ち合わせた。
「いかにも」
「シュミットバウアーが娘、歳は二二、三と申したな」
「御意」
「武術の心得があると」
「女だてらに白兵格闘術の達人と聞き及びまする。装甲擲弾兵のよほどの古参兵でも、互角には戦えぬとやら。頭の良い娘との噂もございまして…誰でございましたかな、言い寄って来た男をぐうの音も出ぬほどやりこめたとか。いえ、これは手込めにしようとした相手を叩きのめした、でございましたかな」
「よい、そちは話が長い」
「恐れ入りましてございます」
「して、その娘、名は何と申した？」
「確か…はて、これは覚えておりませぬな」
　皇帝は苦笑したようだった。老い朽ちたかに見せて、この老臣が貴族間の情報に至極詳しいことを知るのは、皇帝自身を除けば、子爵自身の僅かな側近のみである。シュミットバウアー男爵家の娘…今は、男爵家の女当主…の名を忘れたというのは、子爵の記憶の底が綻びたゆえかも知れず、そろそろ謁見を終わろうとするための合図なのか、それは分からなかったが。
　いずれにしても、皇帝自身も謁見を引き延ばしすぎたという意識はあった。
「よかろう。シュミットバウアー男爵家の娘、アンネローゼが許へ仕える心持ちあるや、そちから当たってみよ」
「伯爵夫人付きの女官でございますか」
「仮にも男爵夫人を名乗る者であってみれば、それなりの地位は

見繕ってやろう」
「なんぞ、伯爵夫人がおそばに不穏なことでもございましょうか？」
　再び、人類の統治者を名乗る老人の、空気の抜けるような笑い声が、謁見室の空気を震わせた。
「人の造りしものは、いずれ滅ぶ。どれほど多くが行を共にしてくれるか、それが滅びの華麗さを定めると、そちはそう思わぬか。滅びは華麗なほどよい――――と」
　不可解な、奇妙に哲学的でもなくもないフリードリヒ四世の言葉を、グリンメルスハウゼン子爵が理解したのか、あるいは何か思い当たるところがあったのか。相変わらず半ば眠りの世にあるかに見える子爵の表情からは、何もうかがい知ることはできなかったが。
「承りましてございます。では、忘れぬ内に退出をお許し下さいますように」
「許す」
　皇帝の表情の薄い顔が、もう一度苦笑の形にその輪郭を変えた。
「忘れるでないぞ」
「御意にございます」
　深々と頭を下げ、長衣の裾を引きずるようにして退出していく老子爵を、件の式部官がほっとしたように見送る。しかし、次の謁見者を呼び込もうとしたとき、皇帝の鳴らす鈴の音がした。
「しばらく薔薇園の方へ行く。謁見の者は、予が戻るまで待たせておけ」
「――――」
　冗談ではなかった。この日の謁見者はグリンメルスハウゼン子爵を含め、全体の四分の一も済んでいない。
　が、相手は皇帝である。形の上だけにしても、銀河帝国を統べる最高権力者だった。反問は、少なくとも公式には許されていない。
　待たされる謁見者たちのしかめ面と非難の言葉を思い浮かべながら、式部官は形だけは恭しい跪礼で皇帝の言葉を肯った。